

垣根を越えて

京都大学大学院：合成・生物化学専攻 教授 浜地 格

「生命化学」をキーワードとしたナノバイオサイエンス&テクノロジーは、極めて学際的な研究領域と考えられており、いくつもの専門分野と境を接している。曰く、生物と化学、化学と物理、物理と生物、化学生物と情報、などなど……。それはピュアサイエンスから高度テクノロジーまでを包含し、用いる研究手法や研究哲学、技術開発思想はそれぞれに立場によって大きく異なっている。とても旧来の一つの枠組みには収まりそうにない。しかし観点を改めてみれば、そのような状況はいろいろな新しい出会いやこれまでになかった刺激的な発想を個々の研究者や分野に提供する“わくわく”するような場となる可能性を秘めていることを意味する。

FIBER が目指すナノバイオ分野での新産業創成・社会貢献は、このようないくつもの境界領域の垣根を越えて進むことになるのであろう。境界領域の育成は、この国、特に大学では苦手とされてきた感がある。しかし、杉本所長がNANOBIO:NOW 第一号のメッセージのなかで紹介されている FIBER 研究所の4つの特徴は、まさに境界を乗り越えるための原動力を生み出す見事な仕掛けのように見受けられる。「垣根を越える」ために必要なものとは、何であろうか。異なる領域で使われる（一見異なる）言葉を理解する bi-lingual な能力、今までにない手法・技術を吸収し理解し応用する柔軟な発想、などは大事であろうが、不可欠ではなさそうに思う。最も重要なのは、個々の立場に固執しすぎず多様な立場から物事を捉え、自らを裸にししながら立場の異なる相手と真摯に向き合う開かれた心ではなかろうか。FIBER で試みられ始めた種々の仕掛けが、神戸から社会へ、また世界へ、領域や世代を軽々と越える新しい想いととも広がりていくことを心より期待している。

2006年 NANOBIO NOW 巻頭言より